

畫圖西遊譚

四

和書門類	四三三〇號	一三七函	二架	五册
------	-------	------	----	----

內閣文庫	和書類	四三三〇號	五册	一三七函
------	-----	-------	----	------

內閣文庫	
番號	和 43230
冊數	5 (4)
函號	177 1009



教部省
文庫印

圖書
文庫

圖書
香

西遊旅譚卷之四

内一〇三九四號

十一月十四日長崎を發して三里時津に到り十五日朝船
 利風雨波のり大村領龜浦と云小島に到る程う船と
 出て又小串と云る小島に到る大串島有船よ出海岸を
 出岩名雲母と云る大風雨と云る泊る十六日己の刻
 比船と出て六里を走平戸領針尾瀬戸に到る大村領
 左平戸領と云る地の辨天沖の岬と云る此半里程の中
 山入組組詰と云る潮岸岩に碇泊しと云る雲珠捲
 をとらん誤乗入船忽沈むと又海底岩石拔出る

西遊旅譚

西の白波が飛で沸湯

のぬー湖海をぬと

家千湖にみ乗



西遊草記 四
沈みぬる
大月一日見ゆ
西遊草記 四

向所長崎の方々

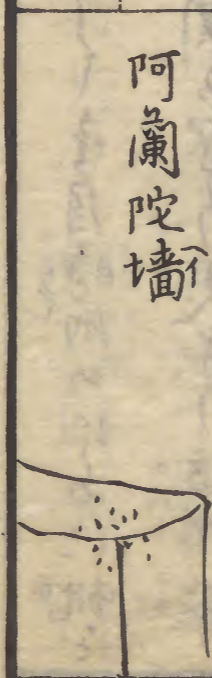
和歌山
平久



平戸城下
勝青山ヨリ
眺タル圖



平戸城下觀音院の地内鐘ツリカネは支那より渡り來りたるに
 實に支那物にして播州尾上乃鐘カネと同物なりとのりたる
 觀音堂より小松重盛の觀音堂へ又阿部宗任の塚より
 昔と和蘭及イギリスより此島に船とる者ツケは
 園の屋舎より石を運りてヤシを造りて市街乃
 橋石とめりけり事長崎の如く昔西洋の人上月廿三日
 至りて寺の開基支那僧より造りて今に此日と祠との
 俗家にあび候等搗臼ツキウスの
 觀音院地内鐘之圖



阿蘭陀牆

聖護院御願所平戸島觀音院
 奉施入鐘一口應永十二年未
 十二月日と彫りけり



天人樂器を鑄り





東方瑣島アリ

對馬

北秀

州堂

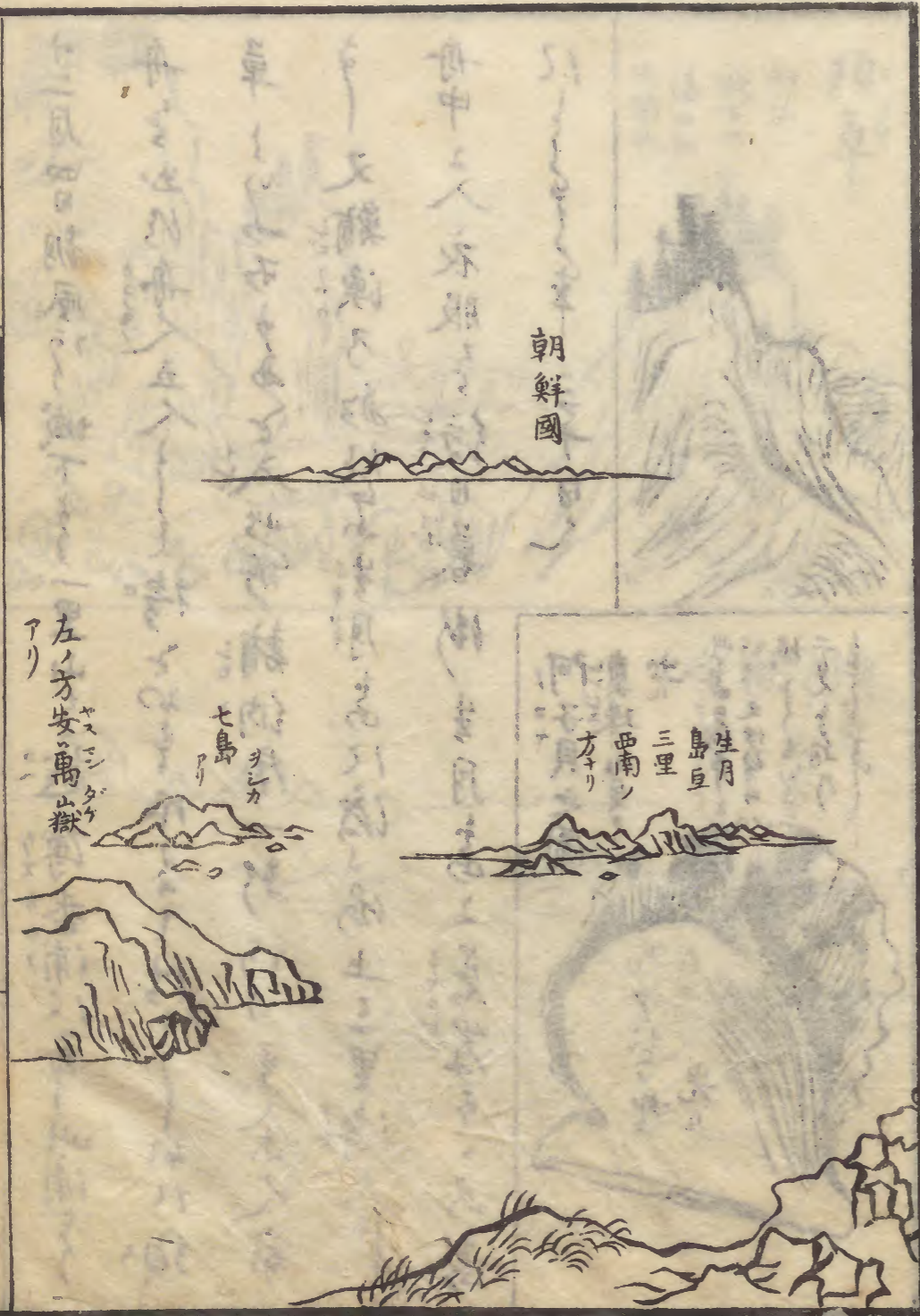
大島 三豆 無人 軒余百家

島宅 軒余百家

横島

白嶽頂

開三三



朝鮮國

左ノ方安萬嶽

七島

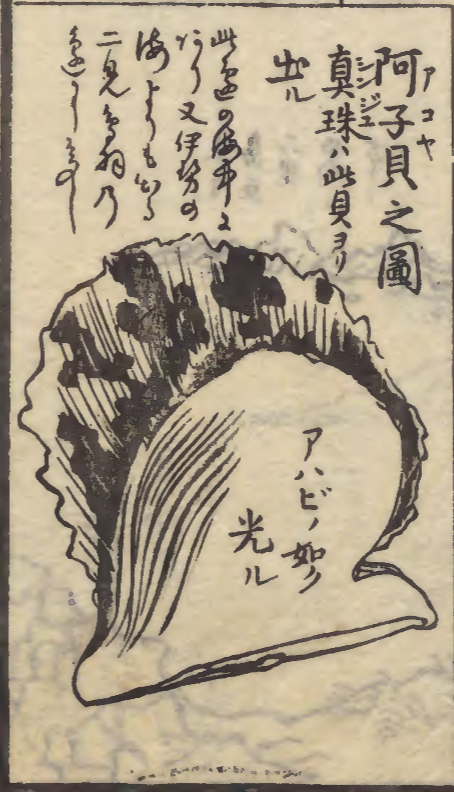
生月 三豆 島宅

軒余百家

白嶽頂

開三三

十二月四日朔風巧り城下より一里山を越薄香浦に到り此浦より
 舟を出り舟人五人一移とあり風を以て此より一移り須
 草より少ありと入此所納屋一軒あり其余人家
 舟中入衣服を紋日暮漸生月島に渡り海上三里濤大はて
 に

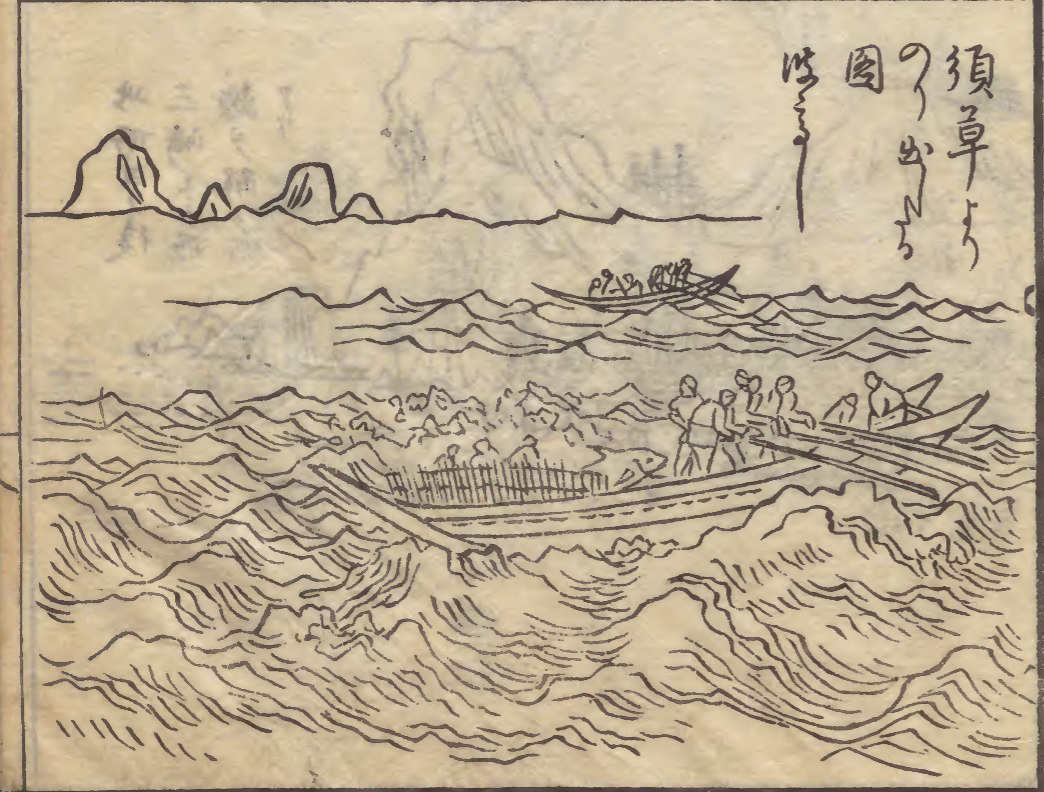


須草

此所の
 城下の
 後田助
 の脇也



須草より
 の出づる
 図



生月島之圖 巨三里



孩子嶽

遠見 番所



五日四時より 孩子^ヤが^ガ嶽^ケ頂^トに
のび^び路^ぢ田^で夫^らの^ら家^が行^く石^をと^り圍^{んで}
登^りて^く金^を作^る世^を登^りて^く
嶽^頂ふ^ま頂^にを^見見^る人^の
の^日一^年雨^三及^にあ^る
西^乃方^暮色^国と
支^那の^地也^{なり}



ヤ、ガ、ケ
子、嶽、ニ
登、山、中、小、童
来、園、如、シ

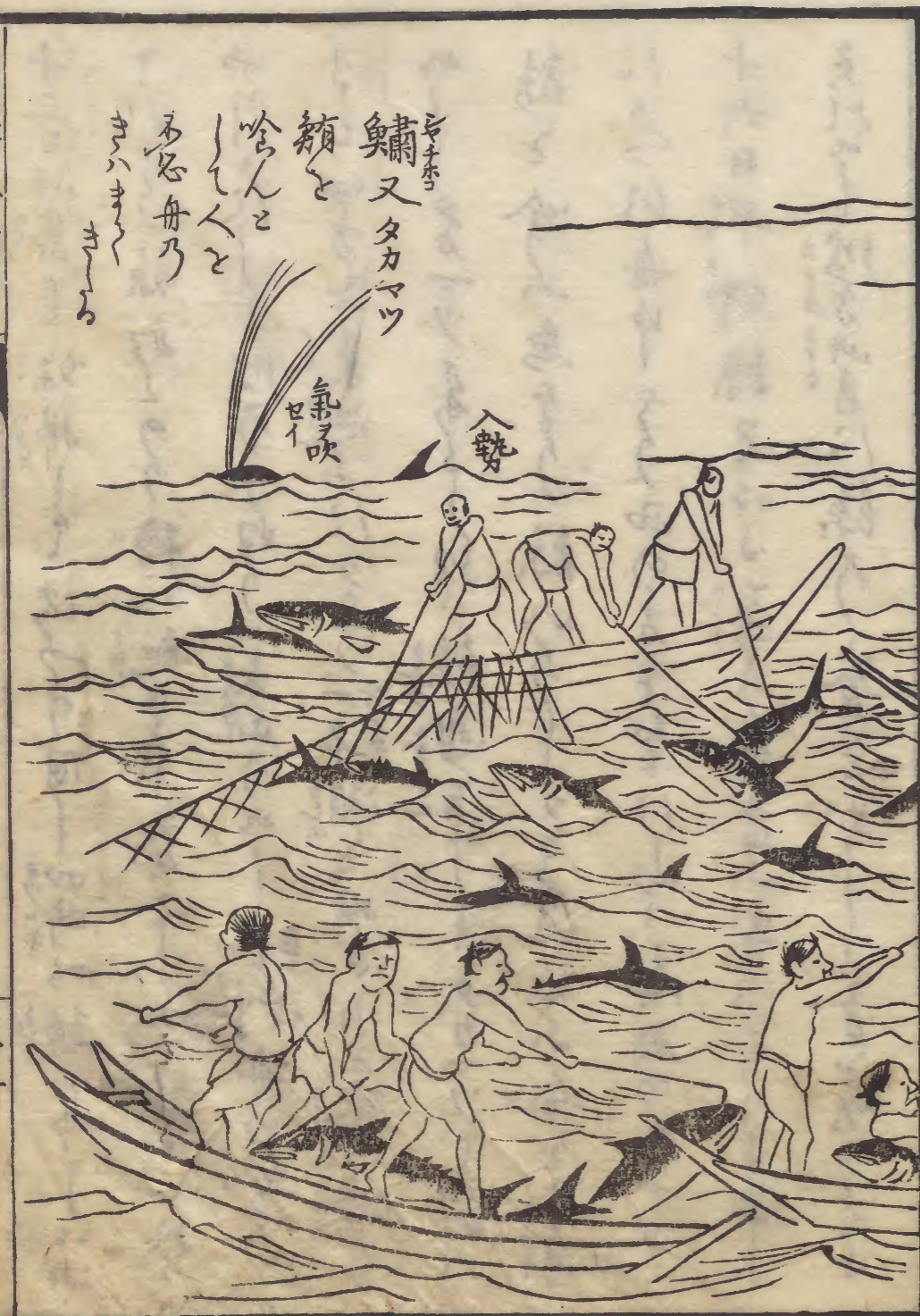


西遊談四
五日四時より 孩子^ヤが^ガ嶽^ケ頂^トに
のび^び路^ぢ田^で夫^らの^ら家^が行^く石^をと^り圍^{んで}
登^りて^く金^を作^る世^を登^りて^く
嶽^頂ふ^ま頂^にを^見見^る人^の
の^日一^年雨^三及^にあ^る
西^乃方^暮色^国と
支^那の^地也^{なり}

此島海中より龍の天に昇事なる龍昇人として海波
 千珠の如く捲りて天より黒雲降其雲波とて
 ど波よりうき舟り天上とて鱗とて魚の尾乃とて
 多水雲れ中よりさがる即龍の尾より故り此島のまは
 龍の昇とて鱗の尾とて漁文より八日此島乃とて
 ねかして不箱漁とてお箱のま月山とて
 岸とてお水とておに山の網に網と布一網と
 二三百或四五百大漁とておと千も入とて

箱網之圖





鱈漁



十三日此島も 蝶拂とて流るる同 四時以 鯨来る
 されり鯨船より 槍八艇 矢のこころをぬ
 やりたりと流るるぬりハ太山乃ハ 主刺舟のおと
 うち四方と乗廻りにタカツ一名 潮とぬき山に映 煙乃
 一タカツあるとハ鯨船に去りタカツも別
 鯨を喰ふ魚なり 鯨ゆりて 放る舟を
 に之舟中より西の方を望むに 唐画の如
 十六日早朝 鯨をゆる直る舟を乗出ると
 去れり 波方此島に鯨乃 脊を出一 鯨と云とる

夫より舟ハ鯨のる方、進て 走尤平戸島と生月島乃皆
 の海より鯨いづしめし、是れ舟と生月島の方、進
 らんとき、時りやや、きり大島乃沖、一艇の
 船より鯨をえ、真鯨と云、旗を、四方の舟
 鯨の方にあむい、十艘よりなり、
 鯨をゆるる、
 とるに、
 といつ、
 岩より、

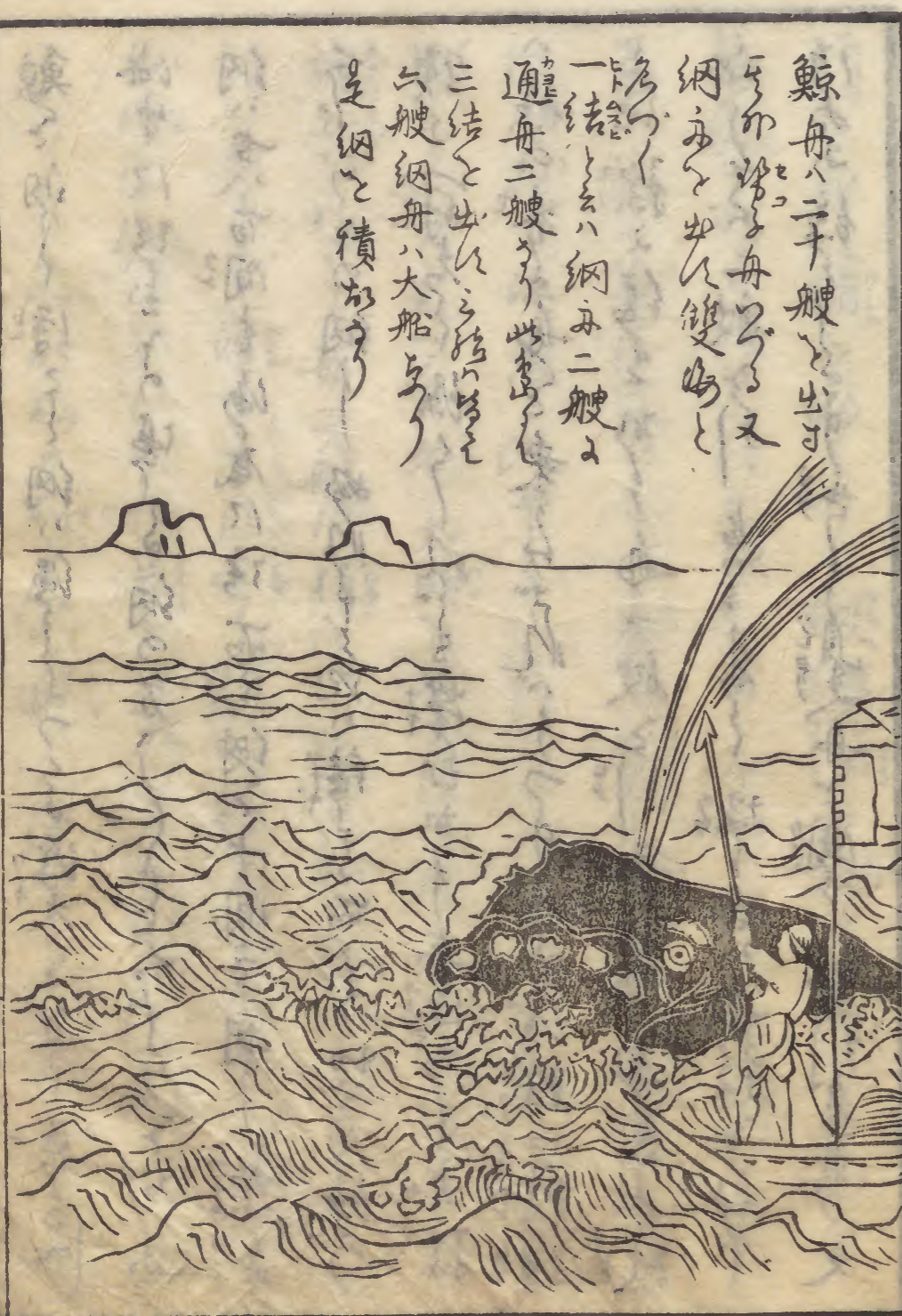
巨鯨乃大洋海
 三崎ハ鯨と解、
 居る、

鯨魚之圖

鯨魚之出也海之
北之凡多也吹別
夫之凡多也吹別
搜氣之吹凡尾
之出也吹之海
底入



鯨船ハ二十艘ト出
其船ハ凡多ト又
網ハ凡多ト又
一結トハ凡多ト又
通船二艘ト出
三結ト出
六艘網船ハ大船ト出
是網ト積ナリ



鯨を綱で得て綱を纏きつゝる浮木を舟と暮の如
 海中に張るる綱の方へくぐらふとわづ
 綱は六百間も海底に張り綱を十間子間り繋ぎ
 くぐらふの綱は好むと此に繋ぎおとす切て鯨乃
 頭を肩をくぐらし舟も滑り舟は舟に乗り
 一鯨の脊を舟に乗らざればつゞりおらば一鯨投
 るに鯨も縁をかり舟に投り又一艘の舟も乗
 とくぐらふ二般有り舟も乗らば舟に投り
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又

頭を舟へ廻り舟を乗らば舟に投り
 鯨の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又
 舟の縁をくぐらし舟は舟と繋ぎ鯨の方へ又

西遊録

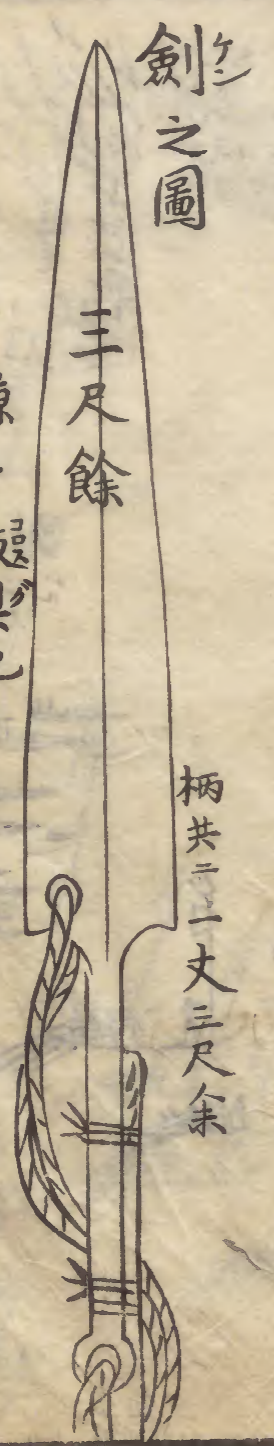
二七

と止トジ心ココロ余ヨ此ココ海ウミよりヨリ鯨クジラのノ鱗ウロコのノ類ルイとシ判ハカりテ執シツ事シ大ダイカコノモノ者モノ
 のノ働ワザ油アブのノ戦セウ團ダン久クのノ名ナはハ鯨クジラ乃ナラバ血チ味ミやハ朱シのノ色イロとシて
 別ワカ大ダイ島シマのノ沖ウチ平ヘイ戸コのノ嶺ミネ高タカ向ムカ海ウミ島シマハハ岐マのノ團ダン對タイ馬バ遠エン江カに
 朝鮮チヨウセンのノ大ダイ海ウミよりヨリ鯨クジラハハ湖ウミ初ハツ更シ色イロ之ノ味ミ亦モ高タカ所トコロより
 湖ウミもモ鯨クジラ乃ナラバ半ナハとシ隠カクれテ全ゼン體タイハハ魚イサノノ身ミ夜ヨのノ味ミ亦モ高タカ所トコロより
 中ナカもモ是コトをシてシ湖ウミ中ナカにシ全ゼン體タイとシ海ウミ月ツキのノ光ヒカリも
 大ダイ十ジュウ間カン餘ヨのノ世セ美ビ鯨クジラ也ナリ世セ美ビハハ鯨クジラノノ利リ又マタ之ノ助タケ曰イハふ
 此コト刻キりシてシかクれテ半ナハ此コト島シマノノ雨アメ之ノ及キりシてシて
 鯨クジラノノ全ゼン體タイとシてシもモ此コト稀ヒナリナリ

莫モ踪ソウ之ノ圖ズ又マタヨロツク此コト製シ生ナマ鐵テツとシ作ツク鯨クジラノノ刺サシ入イ綱ツナとシてシて
 半ナハよりヨリ曲カマ四シ尺シツ五ゴ寸サウ柄カバトモニニ長ナガ廿ニ九ク尺シツ



此コト圖ズのノもモ此コト鯨クジラノノ刺サシ入イ綱ツナとシてシて



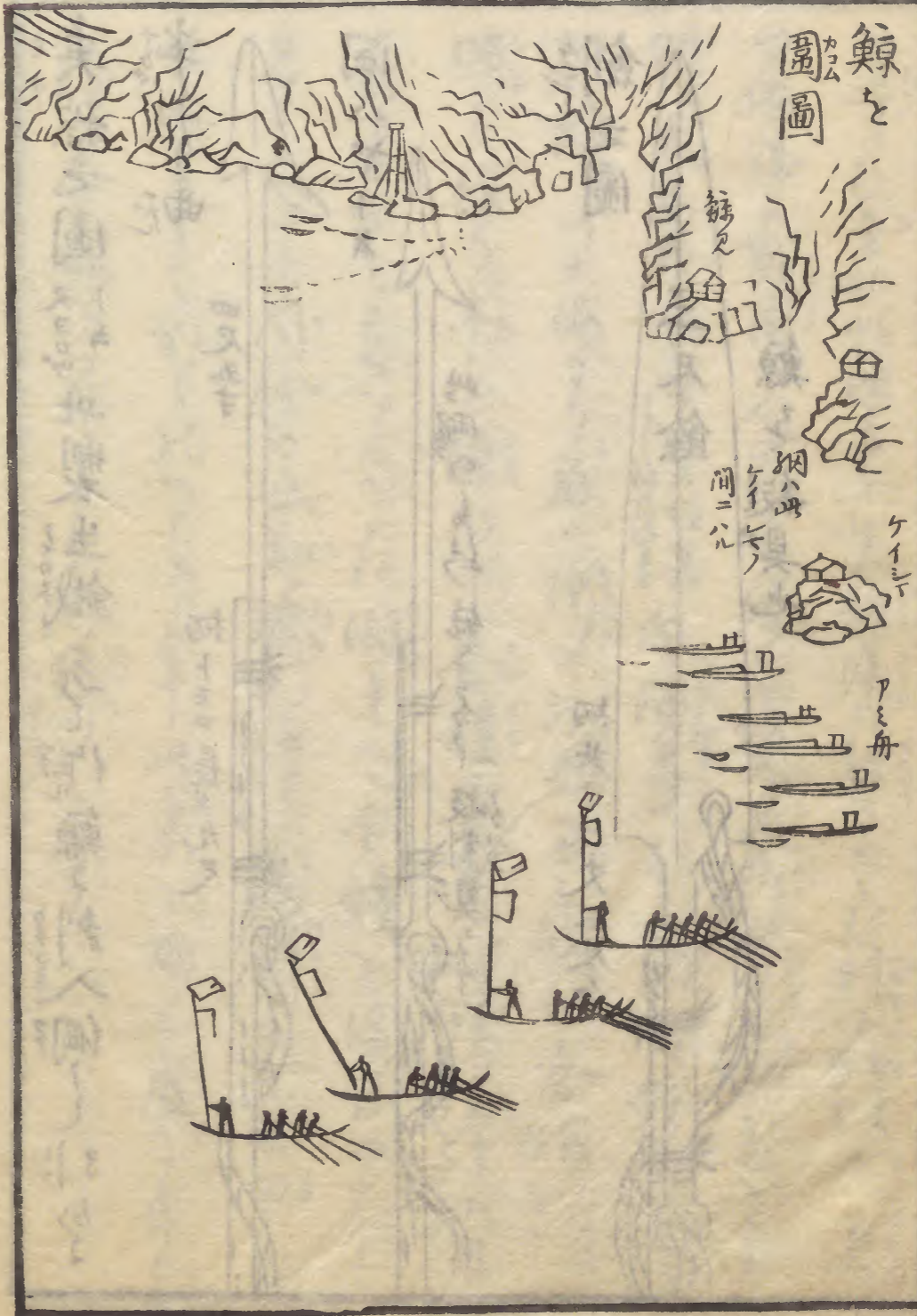
劍ケン之ノ圖ズ

三サン尺シツ餘ヨ

柄カバ共トモニニ一イチ丈チヤウ三サン尺シツ餘ヨ

鯨クジラノノ殺コロ具グ也ナリ

鯨を
園圖



鯨

網ハ
ケイニ
間ニル

ケイニ

アミ舟

三崎鯨ヲ
切解所ナリ

鯨ニ運

吹潮勢

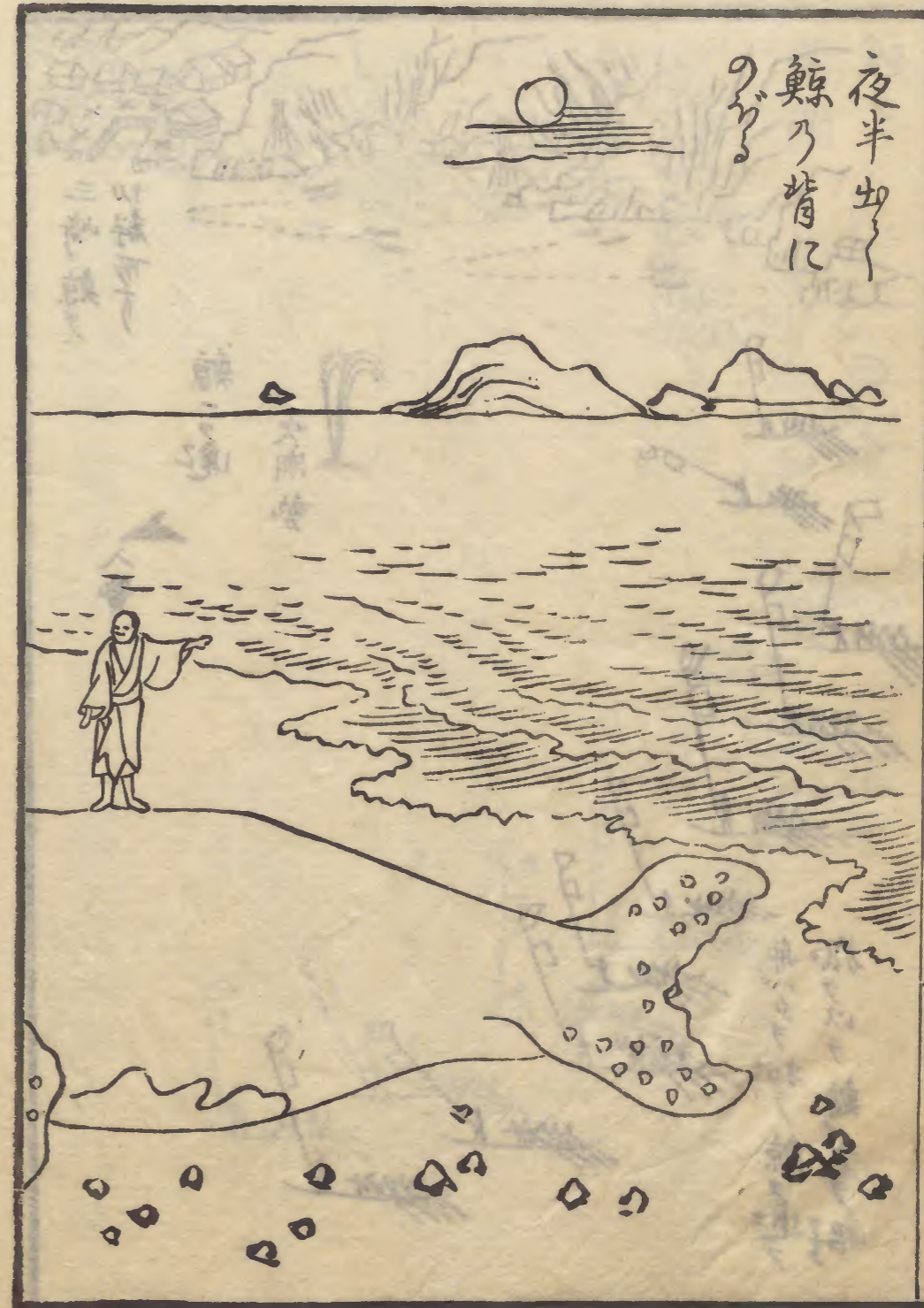
入勢



舟ハタラ
旗ヲ以テ
鯨ヲ追フ
招マシム

西遊
談
四

夜半ゆゑ
鯨の背に
のびる



十七

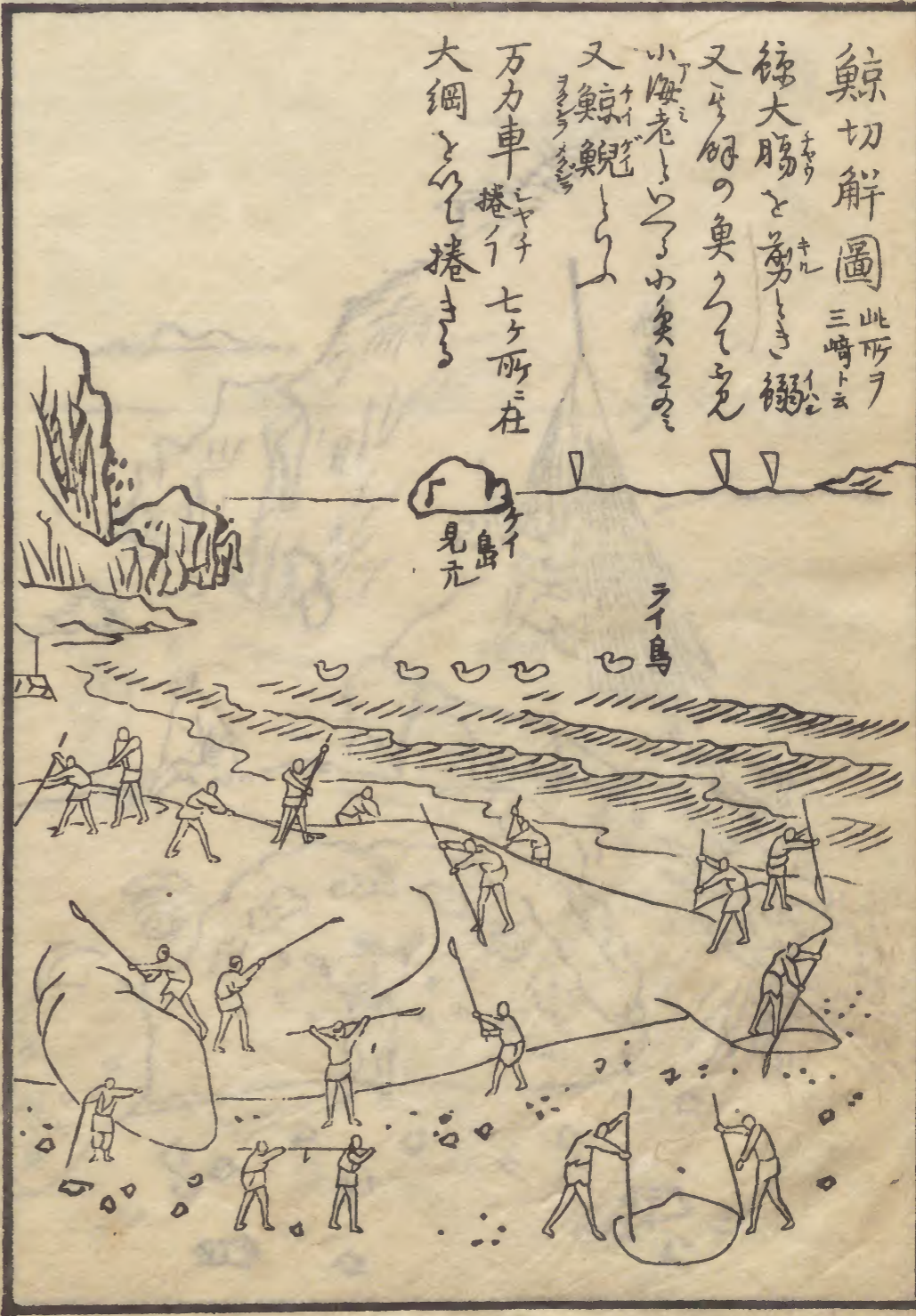
126

西遊
談
四

鯨番人



鯨切解圖 此所ヲ
三崎ト云
鯨大腸と為キル
又その好の奥くろくろ
小海老と云る小魚との
又鯨鯨と云
万力車 捲イテ七ヶ所在
大綱と云く捲き



肉納屋
腸納屋
骨納屋

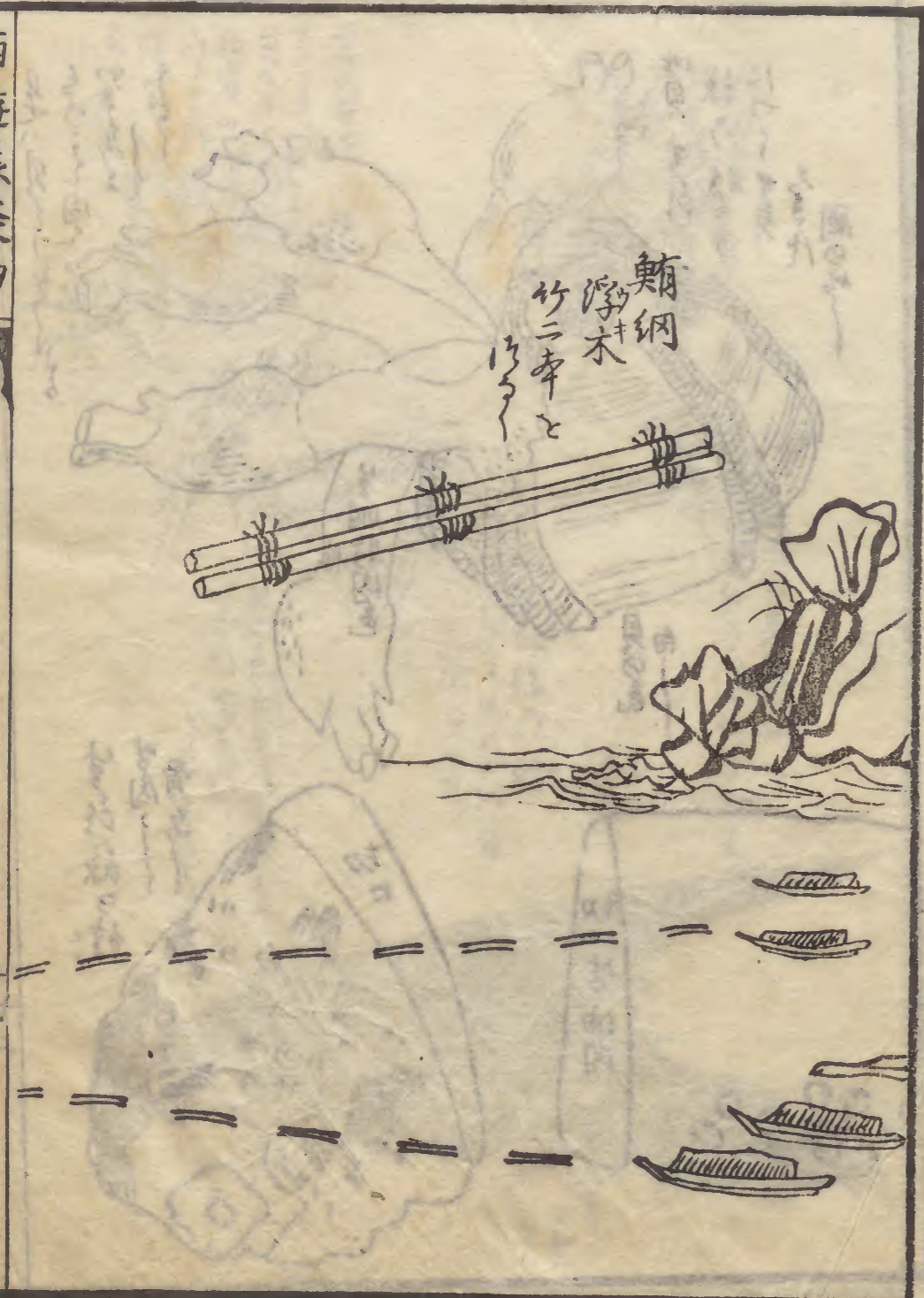


此島々所産の鯨五品あり
 世美鯨 上品味美大なるものハ十間 油或百斤と出せ
 長須鯨 中品味淡初希ありし 頭海上後入底走
 生以鯨 中品サ剛し又多ヤキ味同長須
 児鯨 下品剛極にし骨がし母と破る
 弱鯨 下品同事稀なる鯨の名し吹弱あり
 右各多異也予見所の島の世美生頭之二品をこ解ハ見



西遊叢書





鮪網
浮木
竹二本と
はち

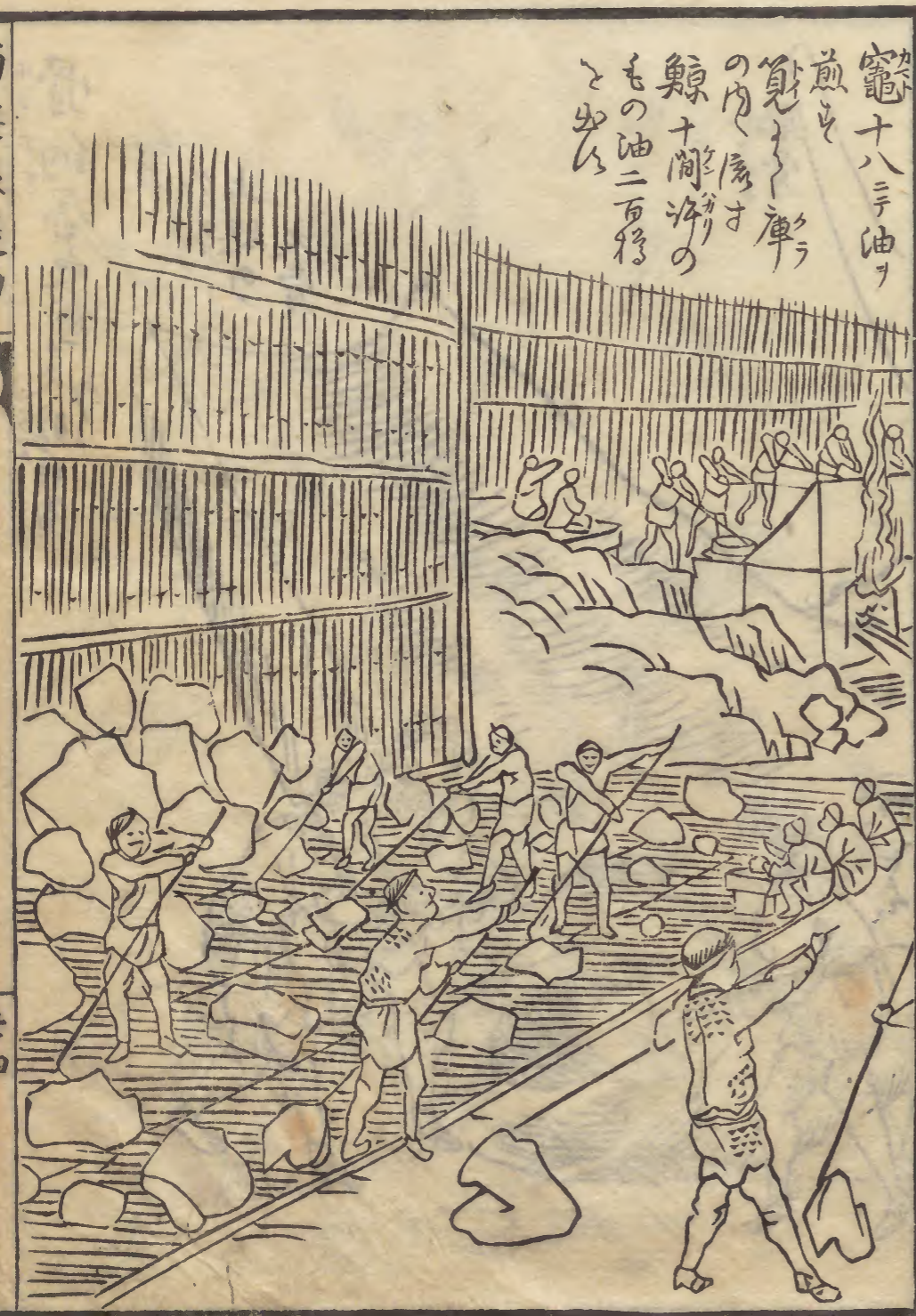
鮪見樓



鮪見

舟に上りて
旗と出で
主格の
舟に印を
只網を引
開





竈十八三油ヲ
煎シ
魁トシ庫ラ
の内層オ
鯨十間海ノ
もの油二百石
と出ル

肉納
之屋
之圖



役人



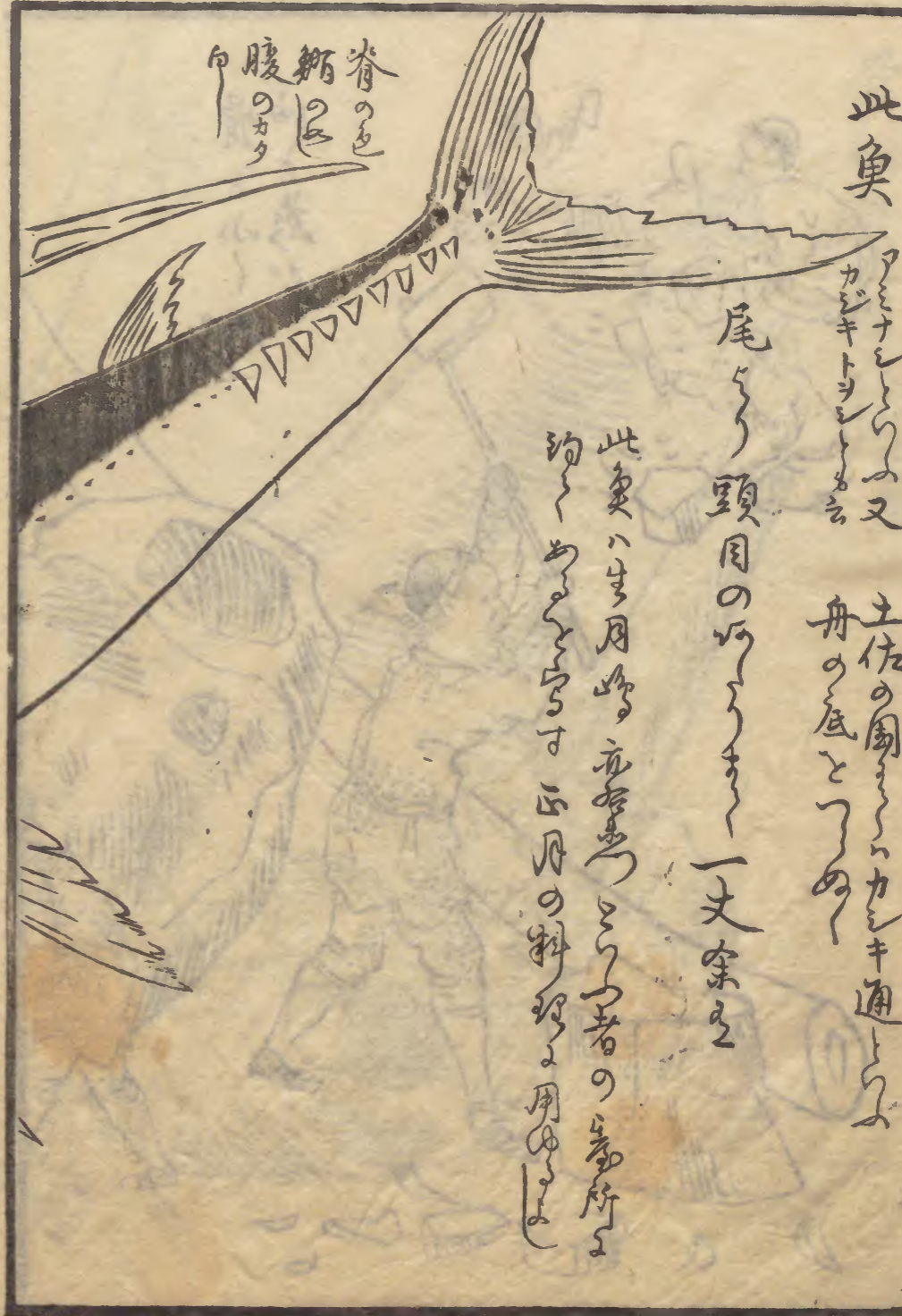
骨と油と煎カキ

骨納屋之圖 ホナヤ 又納ホナ



肋骨アホ子

上腮ウラヒの大骨オホホネ



脊の色
縹は
腹のカタ

此魚

アミナシと云ふ又
カジキト云ふも
カ

土佐の國の海にカキ通と云ふ
舟の底と云ふ

尾の頭目のつらき一丈余を

此魚は五月の月、亦或は六月の月、
釣るる者あり。五月の料、六月の用也。

西遊叢書

廿五

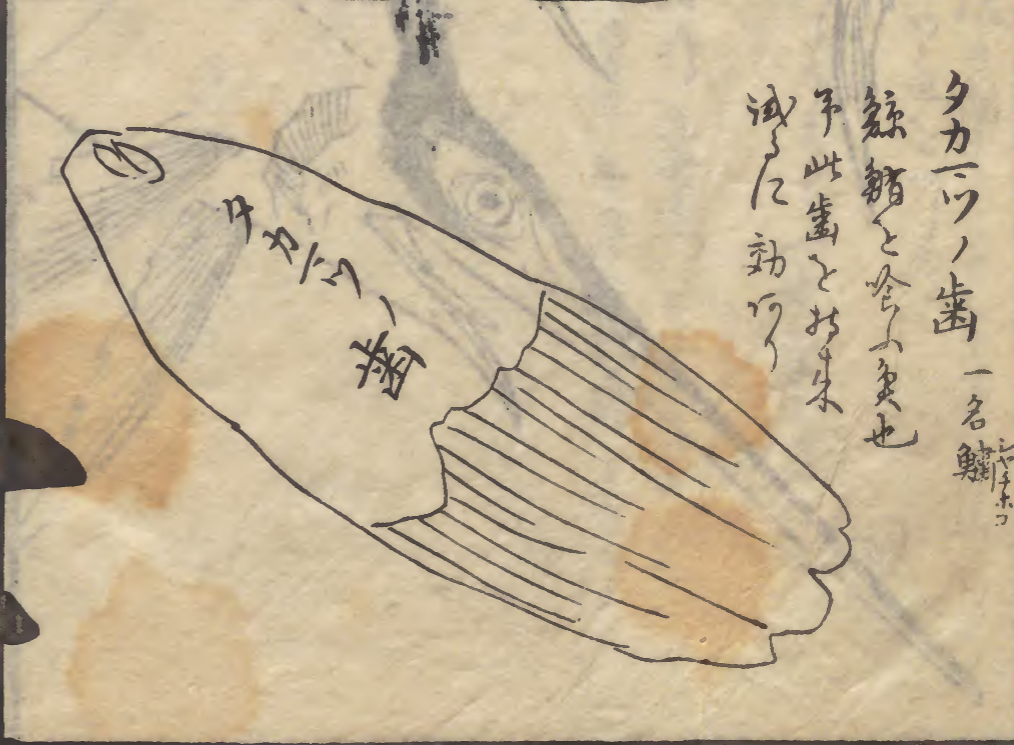
ライ鳥

此鳥... 緑の肉と... 鷗... 歩...



頭ウス横
紫生胭脂ウス色

夕カワノ歯 一名... 緑... 予此歯と...



夕カワノ歯

此圖ハ此島の漁父に尋く... 海中に湖と吹氷を...

夕カワツ
一名シマチホ
大廿二間余



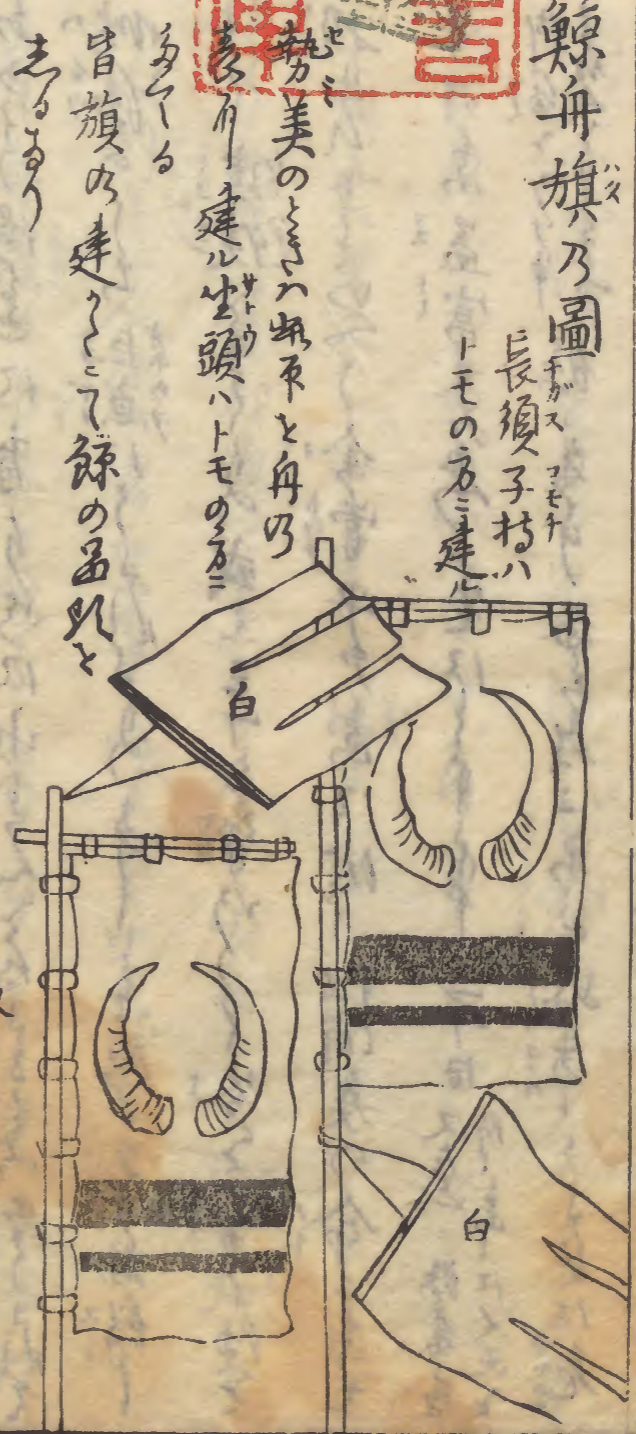
地圖をみるに 錦旗ハ余通一と云ふの事と云へ 見えぬものぞ
 一毫毛も 嘘言なり 文章と再買はせばなりとの事
 五島平戸を紀州熊野浦此浦は紀州の旗本が 幸いにもあつた十六町
 海文の御旗を遠里の御旗の 合衆と云ふ者なり
 此れを五島を滅下と云ふ事ハ九里の所なり 平戸
 と同五六里又ハ十二三里と云ふ事ハ一餘里にては極月
 一月初旬尤海を走らざるは少ありと云ふ者
 ハ人刺子一人他の者ハ平戸に在りては餘を舟に運ぶ
 舟一舟露し水練と云ふ事ハ命と云ふ事ハ極月

切かき海邊に育りぬに水と云ふ事ハ
 海邊の 巨魚に云ふ事ハ 放る事ハ若し
 一虚候と云ふ事ハ 威と三年と云ふ事ハ 春と云ふ事ハ
 扱出ん事ハ 余嘗平戸島に遊り 松浦彦の命と云ふ事
 生月島益富又お島に云ふ事ハ 二十日 又云ふ事ハ 旗本府
 出陣と云ふ事ハ 旗本府 旗本府 旗本府 旗本府
 此れを云ふ事ハ 此れを云ふ事ハ 此れを云ふ事ハ
 元日此れを云ふ事ハ 門松と云ふ事ハ 雑煮といふ事ハ 旗本府
 四日此れを云ふ事ハ 平戸島の方白嶽の事と乗船と云ふ事ハ



鯨舟旗乃圖

丈に倍して赤壁し鯨舟と云ふ油水と云ふに
岩壁赤大楮石のれり画のりて
乗舟此夫より舟と出て平戸城下に
田助に



勢美のよみハ船平と舟の
多り建ル生頭ハトモの方ニ
多り
皆旗の建くこと鯨の画以と
あるあり

紋半の角あり

卷之四終

泉
橋